

“師”と“匠(たくみ)”



入江喬介

マイクロソニック株式会社

[略歴]

- 昭和43年3月 武蔵工業大学電気通信工学科卒業
- 昭和43年4月 日本無線医理学研究所(現アロカ)(株)に入社
超音波診断装置の開発に従事
- 平成5年12月 アクュソンニッポン(株)に入社
超音波診断装置の販売、技術サポート
(代表取締役副社長)
- 平成12年6月 マイクロソニック株式会社を設立
医療用超音波機器の研究、開発及びコンサルティング
(代表取締役社長)

思い起こすと、超音波に関わって43年が経つ。今、「超音波とは(あなたにとって何ですか?)と聞かれると、「日本の“文化”すなわち“心”」と答えたい。これまでいろいろな分野で“師”と“匠”に出会い、多くの教えを拝受してきた。ここでは、これまでの私の人生の中で大きく恩恵を受けた、特に“道(どう)”の教えをいただいた三人の“師”と“匠”について思いを書き綴ってみる。ここでは工学の道(“工道”と呼ぶことにする)と仏の道(仏道)の中で特に禅の道(禅道)について、その“師”と“匠”から拝受した恩恵と今でも残っている心に沁みる言葉を思い起こしてみたい。

まず、私が超音波に関わることになった最初の“師”との出会いは、私が失態を演じたことから始まる。それは大学3年生の終わりの頃、超音波研究室に入室を希望して見学に行った際、入口の下駄箱においてあった(一番清潔そうな)スリッパを拝借して入室してしまったことに端を発する。私が選んだのは(こともあろうに)“師”のスリッパであった。それが発覚すると、案内担当の先生には「君の名前は!」と聞かれ大きな声で怒られた。そのとき“師”は多少当惑した顔をされていたようにも思えたが、怒ることもなく平然として研究室に入られ懇切丁寧な説明をさせていただいたのでほっとしたことを覚えている。この寛大な心と温厚な人柄に打たれ、即座に研究室入りを決断したわけである。勿論、この失態を回復するべく、入室を許可された4年生の春休みには毎日朝一番で研究室に通い続けたものである。その甲斐あってか、その後30数年余に亘り“師”のご指導を拝受することができた。“師”は、常に物静かであったが、内に秘めた(超音波に対する)情熱は激しく、一生を超音波に捧げたと言っても過言ではない。“師”は超音波を盲人用に役立てたり、超音波画像に関する研究成果(グレイスケール表示)を臨床に(乳腺画像として)応用するなど、現場(ユーザー)との関わりを持ちながら研究をされていた。また、“師”は研究のみならず、公の仕事(JISやIECの標準化など)に於いても国内、外で貢献されていた。私も師に導かれ一緒にすることがあるが、何事に対しても情熱を燃やし、奉仕の精神で活動されていたことを思い出す。このような“師”の生き方に接することによって、私も自ずと(この分野に)傾倒していき、“工道”を学ぶことができたように思う。

次にめぐり会うことのできた“師”は、超音波“工道”の“師”であり、かつ物作りの“匠(たくみ)”である。私が物作り(超音波診断装置の開発)を命じられて何年目であったか、“匠”は私に(中身が丸出しになった装置を前にして)「モニタに表示された画像を見たら、中身(装置内部の回路がどのように作られているか)を読めないと駄目だ(プロとはいえない)」と言われたことがあった。当時は、そんなことができるのか?と疑問に思ったが、毎日、毎日の“匠”の「叱咤激励」ならず、「叱咤叱咤」をいただいての実践訓練により、経験を積むにつれてその可能性を信じるようになってきた。当時から宮大工に興味を抱いていた私にとっては、まさに日本の伝統文化を引き継いでいる宮大工の修行と同じだなと感じ、張り切って訓練に臨んだ。もう一つ、“匠”から得

たものがある。それは“(超音波の)画(え)作り”である。入社当時から、“匠”は心臓のUCG(Mモード)の装置を開発していたが、いつも自分の胸に探触子を当て画面上の画像を観察しながら装置の調整をしていた。勿論、ユーザー(医師)の意見、評価を聞くことも怠らなかった。その姿勢はずっと変わらず、腹部の装置の開発においても同じであった。“匠”の黙々と画像を見ながら装置を調整している姿は今でも目に焼きついている。傍に居させて、自分(の振る舞い)を見せることによって学び取らせようとしていたかのようなようであった。その姿勢と“心”を学ぶことができたので、できる限りそれを実践し後進に伝えていくことを心がけている。

三番目に挙げる“師”は“禅道の師”であるが、私にとってはむしろ人生の“師”である。“師”にお会いする機会を得たのは二十歳の時で、それから約30年の間(不肖の弟子であったが)教えをいただいた。座禅会の朝“師”のご自宅(道場)に到着すると、いつもお茶を立てていただく習慣であった。私が三十歳頃のことであったか、“師”がお茶を立てながら(視線は茶碗の中に置いたまま、ポツリと)「良く寝てるかね」(「はあ」と答えにならない返事を小さくすると)「寝ないとだめだ」(また「はあ」と)「一日終わったらあきらめなさい」(少し間をおいて)「良く寝て、朝起きたら、よっ!やるぞ!と決めて、後は全力を尽くせば良い」と(腹の底からの低い声で)励まされたことは、今でも鮮明に覚えている。“師”は全てお見通しで、(私の)身体のコンドーションから心の内まで見透かしておられた。不思議なことに、その夜は良く眠れたものである。今でも、眠れないようなことがあると「今日は終わり!」「寝るぞ!」。朝は「よっ!やるぞ!」を発している。“師”曰く「なるようになる」「あわてるな」とも。

現在も多くの“師”や“匠”の恩恵に与っていることに感謝し、今後とも超音波“道”を探究し、少しでも世に貢献できるよう精進していきたい。